



## するがの極

「きぬむすめ」のうち、JAが定める厳しい基準をクリアした一等米だけを「するがの極」として販売。粘りが強くもちもちとした食感が特長です。平成28年度に「するがの極専門部会」を設立。令和元年度には県や市町と連携して「ブランド米推進協議会」を立ち上げ、生産・販売拡大に取り組んでいます。

## 営農アドバイザーから

ながいずみ営農経済センター

わたなべ みつとし  
渡邊 充利

青壮年部なんすん地区本部長泉支部では、町内小学校の児童を対象に、田植えと稲刈り体験を行い、食農教育にも力を入れています。「するがの極」の生産では、地域の畜産農家の堆肥を使用した栽培試験に協力いただき、耕畜連携栽培の仕組みの構築に取り組んでいます。



## 循環型農業を目指して耕畜連携 「するがの極」生産者の所得向上へ

### 共同ほ場で栽培をスタート

青壮年部なんすん地区本部長泉支部では、農作業が困難になった人のサポートや休耕田の活用に、水稻の請負作業を行っています。その一環で、平成30年度に「するがの極」(きぬむすめ)の栽培を共同ほ場で始めました。近隣では他品種の栽培が多く「中生(なか)て」品種で何か栽培を始めたい」と支部長の加藤さんがJAに相談し、「きぬむすめ」の

### 堆肥を使った循環型農業を実現

提案を受け栽培始動。「他品種と収穫期がかわらず倒伏もしにくい」と語る加藤さん。「基準を満たせばJAが有利に販売を進めてくれる」と話します。

長泉町では畜産が盛んな反面、水稻農家の堆肥利用減少などにより、堆肥処理が課題となっています。そこで令和2年度から、JAと連携し、共同ほ場で地元の畜産農家の堆肥を使った栽培試験を始めました。堆肥使用の水田と化成肥料使用の水田で、食味値や収穫量を比較検証。その結果、堆肥で育てた方が食味値が高い一方、収穫量が低くなるという課題が見えました。

### 部員みんなで協力、助け合い

作業は基本的に全員で行い、誰かができない時は協力し合って栽培に励んでいます。「みんなで作業するのが自然と習慣になっている」と笑顔を浮かべる加藤さん。「一人ではなく、仲間がいるからモチベーションを保って栽培を続けられる。若い力で地域農業を盛り上げたい」と力強く語りました。



# 農

# に生きる

～Challenge to our Dreams～

水稻

するがの極専門部会・

青壮年部なんすん地区本部長泉支部

「するがの極」(きぬむすめ)は沼津市、裾野市、長泉町、清水町、三島市、函南町の96人の生産者が計487ヘクタール栽培。するがの極専門部会である青壮年部なんすん地区本部長泉支部員の12人は長泉町下長窪の共同ほ場で13アール栽培。加藤祥行さん(上写真中央右)が支部長を務めている。



生育を確認する部員と営農アドバイザー(中央右)



長泉町の畜産農家の堆肥を活用



厳選されたきぬむすめが「するがの極」に